

第三章 シェルメス連邦

それは銀色をした天然の惑星のように見えたが、そうではなかった。一五〇キロに及ぶ直径は、天然の天体としては小規模の部類に属しただろう。が、人工的に建造された建築物としては、おそらく人類史上最大のものに違いなかった。

ル・ラント共和国母星から、直線距離で約二五〇〇光年。この宙域を支配している恒星系間国家の張りめぐらした恒星系間航路をたどれば約二九五〇光年の距離に、その巨大な人類の被造物は、本来惑星を持たない孤独な恒星だったF型恒星ラテナの外惑星軌道に相当する公転軌道をめぐる中空に支えもなく浮かんでいる。ル・ラント共和国はまだ知らなかった。

共和国圏の位置する銀河の一隅に、わずか数百光年の距離を隔てて数百の恒星系を支配する巨大な恒星系間国家が存在することを。更には、“シュエクス連邦”と呼ばれるこの恒星系間国家が、実はル・ラント共和国とそのルーツを同じくしていることなど……をである。

約五〇〇年前、銀河系宇宙の半ばは“地球”と呼ばれる境界の惑星を発祥の地とする人類の支配するところとなっていた。“統一された単一の政府”を欠いたがゆえに、余りにも愚劣な戦争に巻き込まれた人類が、我自らを滅ぼしてしまわなかったとしたならば、惑星ル・ラントと、シェルメス連邦の発祥の惑星メルティアとは、人類が銀河全域を支配するための重要な基地となっただろう。特にル・ラントは、その位置ゆえに銀河系外進出のた

めの基地として開発されたのである。

惑星と恒星を破壊する最終兵器による全面的な戦争が人類の全ての未来を破壊してのけたあと、一握りの人類の末裔がル・ラントとメルティアに残された。彼らは生き延び、生き延びる過程でほとんどの記憶を失った。彼らの公用語の基礎となった旧人類の言語体系と、神話に託された忘まわしい全面戦争の記憶を除いては……不幸なことに、ル・ラントとシェルメスは、彼らが銀河を共有するべき兄弟たちであることを知らなかった。

“ヒューロザイオン要塞に入港完了。エアロック接続まで五分待機”

要塞宇宙港は、民間宇宙港に見られる華やかな装飾の一切を欠いている。厚さ数十メートルの超合金と結晶繊維による多重八二カム装甲と、強力極まりない電磁防禦シールドに守られた巨大なエアゲートを、一隻の高速巡洋艦が潜っていくと、広大な宇宙港内に設置されたサテライトの一つに接続した。

“エアロック接続。気圧同調完了。搭乗員は別命あるまで待機。上陸許可の伝達は一〇分以内に行われる。非搭乗員は一〇分以内に退艦を完了せよ。繰り返す……”

巡洋艦「フリスチア」。“非搭乗員”と呼ばれる乗客……有り体に言えば、ヒューロザイオン、またはヒューロザイオン要塞に駐留する艦隊に赴任する連邦空軍の将兵達……が一斉に立ち上がり、バッグをぶら下げてエアロックへ向かう。さして多くない。二〇名には欠けるだろう。

レーフラム・トゥリユー・ネレイドも“非搭乗員”の一人である。幅はさほどないが、長身ぞろいの連邦空軍将兵の中でも十分

に目立つほどの長身。しかし、彼を最も目立たせるのは、青白いほどに澄み切った美貌だった。連邦暦で五四七年生まれの彼は、連邦暦五六六年で一九歳になる。連邦空軍における階級は大尉。一六歳で空軍士官学校に入學し、一八歳の時に卒業、少尉候補生から少尉、中尉、そして大尉にまで駆け上がるのに二年に満たない時間しか要さなかった。

のち“銀河系大戦”が開始されてのちは一〇代の士官も珍しくなくなつたが、この時期で一九歳の大尉は明らかに異例だった。「なに、親の七光りさ」

悪意をこめた囁きが絶無であるといえば嘘になる。レーフラムの父レイフレム・ナイザル・ネレイドは連邦上院議員。それも屈指の有力政治家であり、連邦空軍に対する影響力も小さなものではない。七光り云々の噂がそれなりに説得力を持つていることを認めないほど、レーフラムの視野は狭くない。無論、七光りであるのが自らの実力であるのが、軍人としての自分の資質を認めるのは、彼自身にとつては決して心浮き立つものではない。

「一九歳で軍人とは大したものだね、トウリユー」

ときどき、そうやって鏡に向かつて自嘲してみることがある。

「この先、どこまで出世することやら、先が楽しみなことだ。軍での一階級を得るためにどれだけの死体が必要か考えたことさえなければね……」

少尉から中尉への昇進は“第九次レアナ暴動”鎮圧。中尉から大尉へは“メルティア紛争”。それぞれ数千から数万の流血を見た。冗談ではない……本当に冗談ではない。レーフラムはそう思う。

戦死しないと仮定して、連邦空軍軍人の平均在職年数を考えると、彼はあと四〇年以上は殺し合いを仕事にしなければならぬのだ。これは正気の沙汰ではない。

ヒューロザイオンは広い。宇宙港からリニア・カーを拾って駐

留艦隊司令部区画へ向かう。同乗した下士官や兵士が、まだ幼さを残したレーフラムの美貌と大尉の階級章に腑に落ちない表情ながら敬礼してくるのに無意識のままに答礼を返している。

ヒューロザイオン要塞固有の駐留艦隊というものは、実は存在しない。この要塞の消費を支える、いわゆる“後背惑星”との航路を確保する目的で防空艦隊は常駐する。しかし、要塞の固定火器と協同して要塞防禦の機動力となるのは連邦空軍制式艦隊。現在五個ある制式艦隊が駐留艦隊として、交替でヒューロザイオンに駐留する習わしだった。そして、この時期にヒューロザイオンに駐留するのはオーシボヴィ・シユタルク中将の第三艦隊約三〇〇隻である。

レーフラムはクロノ・メータに視線を走らせる。シユタルク司令官執務室への出頭時間まではまだ約半時間。レーフラムは、第三艦隊司令部にほど近い一角に酒保を見つけた。酒保は、当直任務を終えた士官と下士官たちで八分通りの混み方だった。カウンタにつくと、ウエイターが愛想笑いを浮かべた。

「見ない顔ですね。新任ですか、大尉？」

「そうだよ。今日、赴任することになってる。これから、出頭するところだよ」

「第三艦隊で？」

「まあね。あ、コーヒーを」

湯気の立つ褐色の液体を満たしたカップがレーフラムの前に置かれる。

「軽食なんかいかがですか？」

「いい。もう済ませた。この酒保は、司令部専用？」

「酒保といつても、軍から委託されていますね。ただの喫茶店と変わりませんよ……ところで、前の任地は母星ですか？」

「第二艦隊だった」

「じゃ、「メルティア紛争」にも……？」

言いかげ、レーフラムの綺麗な目が急に冷やかな光を湛えるのを見て、ウエイターは口をつくむ。

「メルティア紛争」……か。

レーフラムはコーヒーを啜る。触れられたくない話題だった。

「軌道会戦」とも呼ばれたターネブルク宙域の戦い。戦艦『コーネット』号の砲術士として参加したレーフラムは、三隻の戦艦と二隻の重巡洋艦を沈め、メルティア宇宙軍の戦意を最終的に破壊した。会戦の死者八〇〇の内、一〇〇〇以上は彼の手にかけたのだとも言える結末である。

本当に逃げだしたい……不本意なままに中断させられた宇宙考古学の研究を、レーフラムは思った。できるなら、手が余りにも血に汚れ切ってしまう前に連邦空軍などというろくでもない組織からは逃げだし、連邦圏の片隅でひっそりと、果たし損ねた夢を追い掛けてみたい。

その時には恋人を見つけおきたいな……などと思うのは、レーフラムの若さだったかも知れない。傑出した美貌に恵まれながら、レーフラムはこれまで恋愛の経験が皆無だった。計算と政略づくで婚姻関係を結んだ父ナイザルへの反発だったのかも知れないが……。

適当なところでカウンタにIDカードを滑らして支払いを済ませる。第三艦隊司令部のビルに入り、司令官シユタルク中将の執務室をノックしたのは、出頭期限の正確に二分前だった。

「レーフラム・トゥリユー・ネレイド大尉です。第三艦隊作戦先任参謀として赴任するよう命を受けました」

「通告は貰っている」

シユタルクは大柄な男だった。顔の下半分を髭に埋め、鼻の下

にもカイゼル髭を蓄えている。胸の幅も広く、巨大なはずの司令官執務デスクが小学生用の勉強机に見えた。

「着任を認める。「メルティア紛争」での活躍も聞いた。その後、参謀教育を受けているな？」

「半年ですが」

スタッフ

「参謀としての成績は極めて優秀だ。第三艦隊司令部は、貴官の着任を歓迎する。早速だが、わたしの他の幕僚とも顔合わせしておきたいし、説明をしておかねばならないこともある」

シユタルクは副官に幕僚の召集を命じ、従卒にコーヒーを運ばせる。

「ここはカルシュ・コーラルが近い。よいコーヒーは、母星よりも豊富だ」

召集された幕僚たちを、シユタルクは紹介する。艦隊参謀長のマシュー・ハルバーステート中佐、情報先任参謀のレーム・エルヴェニツク大尉。後方先任参謀のアントノフ大尉。司令官副官はオグ中尉と名乗った。

「さて、早速だが諸君。第三艦隊は、ヒューロザイオン駐留の任務を来月で切り上げる。カルシュに寄港ののち、カーティア恒星区で演習「ライオンハート」に参加。しかるのちにユアロフレスタ泊地に赴くことになる」

「ユアロフレスタ……ですか？」

恒星系セイモスの惑星ムウノウリアに置かれた第一級補給基地である。ヒューロザイオンからは約二二〇〇光年。連邦圏も辺境に近い。

「しかし、あの辺りの海賊行為は鎮静したと聞いておりますが」

「海賊ではないよ、エルヴェニツク大尉。我々は海賊退治に赴く

のではない」

「では……？」

「最終的に、我々はローウエス、アルヴェスタを経てヴィルワ恒星系シュネーゼルに進出する。ヴィルワ恒星系シュネーゼルだ。心当たりはないか？」

「ないでもありませんね……最近になって未確認飛行物体騒ぎが
続発している……」

「UFO……？」

失笑しかけて、レーフラムはあわてて思い返す。エルヴェニツクは真剣だった。見たところは二〇代の半ばに見えるが、その年齢で大尉というのであるから、情報参謀としてはそれなりに優れた人物であるはずだった。そういう人物が、無意味にUFO云々を騒ぎ立てるとは考えにくい。

「具体的にどういうことでありましようか、エルヴェニツク大尉。UFOというからには人工の天体という意味にとれますが」

「完全に確認がとれているのなら未確認飛行物体とは言わないんじゃないかね、ネレイド大尉」

エルヴェニツクは、レーフラムの生真面目な反応に、さすがに苦笑していた。

「しかし、確かに根も葉もない作り話というやつじゃない。わたしが集めただけで、この三年間に報告事例は三四例。内、二二例は大規模な流星群などを誤認したものだったらしいが、あとの二二例は誤認とは言いにくい」

「なるほど？」

「当時の天体観測のデータベースを全て検索して、これらの報告事例を突き合わせた。他の恒星系からの報告事例も調べてみた。」

三年間で二二例とは無視できない数と結論せざるを得ない。しかも、五五年以前には、シュネーゼルからは一切UFOの報告はないのだ。おもしろいことに、シュネーゼルの惑星改造は五四年に始まり一〇年後の五五四年に完了している。つまり、シュネーゼルに最も多くの人間が常駐し、観測網もきめ細かく張られていた時期にはUFOは観測されず、シュネーゼルから観測網が引き揚げられてから、突然報告が増え始めている。奇妙というしかない」

「シュネーゼルに興味を示している異星人がいる、ということですか？」

「異星人とはまた……できそこないのTVドラマですな」

「そうは言うがな、アントノフ大尉。わたしはその可能性を捨てきれないと考えている。というのは、この二二例だが……いずれも同一方向から現れ、同一方向へ立ち去ったと見られる形跡がある。結論を出すにはデータが不足だが、“ザ・ギャップ間隙”に伸びている、この細い回廊宙域だが……」

「トロヤの懸け橋」……か」

未踏査の領域である。連邦圏は、未だターミア腕の半ばを踏破したに過ぎない。

「そう。ワープに伴うものと考えられなくもない重力異常も何例か観測されている」

「恒星系間宇宙船？」

「そういうことだ。その可能性が強い」

つまり第三艦隊は、異星人からヴィルワ恒星系を守るためにヒューロザイオンを出勤することになるわけですね……確認するレーフラムに、ハルバーステート参謀長が肯定を与える。

「無論、異星人だなどという戯言で一個艦隊を動かすわけには行かない。あくまで定例の艦隊演習“ライオンハート”への参加が名目だ」

「名目は構いませんが……確率は高いわけですね、異星人の宇宙船がシユネーゼルに現れた？」

「そう言うていいだろう。いずれにしても、偶然で片つけるには辻褄が合うことがありすぎる。既に第四艦隊の一部がヴィルワに高密度の索敵・監視衛星を配置する作業を終えつつある。今度、UFOが現れれば、確実に確認済み飛行物体にしてやることのできるだろう」

「……ということだ。諸君、出航は一〇日後。シユネーゼルまでは二五日の予定だ」

シユタルクが締め括った。

出動を三日後に控え、レーフラムは第三艦隊の旗艦『ノースラン』号で旧友に巡り合った。士官学校での同期生だったレイラー・ド・ナカースル大尉である。レーフラムの同期生の中で群を抜いた酒豪として知られると同時に、こと航法関係に抜群の才能を持ち合わせた士官だった。

「来るのは聞いていた。大尉だって？ さすがだな。そうなるとは思ってたんだが」

さっそく再会を祝そうじゃないか、当直の終わったばかりのナカースルは、早速レーフラムをヒューロザイオンのダウンタウンエリアへ連れ出す。連邦首都コーネットの地方時間、すなわち連邦標準時と時制を一致させてあるヒューロザイオンでは夕暮れ時

ダウンタウンエリアの照明は、時間に合わせて照度を落とす。数十階層吹き抜けで作られたこの一画……といつても面積では確実に一〇平方キロを超えている……は、連邦の標準的な都市のダウンタウンを模している。実用一点張りの司令部区画が無数の区画とそれをつなぐ通路とからなっているのに比べると、本物のビルが配置され、地下街があり、街灯が点り、そして百数十メートルの高さの天井には本物の空そっくりのホログラム映像が映写されるという念入りな作りである。

このダウンエリアには笑い話がある。ヒューロザイオンが建造されて程ない頃にエリアの直上の階層で水道配管が破裂し、溢れた水がエリアの天井から漏水したのだ。

「ところが、おりから通りかかった通行人曰く……おや、夕立だ。天気予報もたまには外れるもんだ……とね」

ナカースルは言う。以後、ダウンタウンエリアだけでなく、アツパートウンエリア……要塞居住区の通称……ヤリゾートエリアでも非定期に雨を降らせるようになったのだ、と。

『ノースラン』の先任航法士だ。『ノースラン』号に限っては、艦長と副長に次ぐ指揮権をもっていることになっている。が、まあ、大きな船を動かせるようになってくるのは中々愉快だ」

ナカースルがレーフラムを案内したのはヒューロザイオン・ダウンタウン五番街に並ぶ酒場の一軒である。騒々しさを嫌うレーフラムの性格をよく心得てか、“イースター・ラビット”なる看板を掲げたその酒場は、琥珀色の照明で統一された、閑静な雰囲気を感じている。

「あれは何だい、レイ？」

レーフラムが指差した先に、巨大な卵が置かれている。高さ一メートルを超えそうな、その卵が本物だとはレーフラムにも思え

ない。白く塗られたその卵の表面は、極彩色の鮮やかな模様が描かれているのだ。

「知らんな……何でも、店の名前と関連があるとかなんとか言ってたが、店の者にも実のところよくはわからんらしい」

「……というと？」

「この店は一〇年ばかり前に開店したが、その後オーナーも変わってるんだ。最初のオーナーがああ卵の化け物を据えたらしい。珍しがつてやってくる客もいることだし、その後も手入れを怠らずに店のマスコットにしてあるってわけさ」

「マスコットなら、兎にでもすればいいのに……」

「まあな。兎とはいわんがね、いつそバーニー・ガールだったら言うことはないが、ま。多くは望まんさ。酒場は静かなのがいい。

踊りたいのならディスコがある。歌いたけりゃ好きなところで歌うがいいし、バンドならコンサートホールもあることだ」

苦笑し、ナカースルはウイスキーとワイン、それに何品かの料理を注文する。夕食を抜いた分をここで埋め合わせるつもりだった。

「そういう顔をするなよ。このロースト・ハムは逸品だ。これだけでヒューロザイオンを訪れる価値はある。保証するよ」

「酒のつまみに合うという意味だろう？」

レーフラムが、彼とは正反対の性格とっていいナカースルと席をとにもするのを好むのは、まさにその豪放さゆえだった。他人は知らず、レーフラムは、内省的でとかく内にこもりがちながらの性格を欠点として認識しているのだ。

「食事としても、さ」

ナカースルは早速、氷や水の侵略を受けていない、混じり気のない琥珀色の液体を満たしたタンブラーを口に運んでいる。

「痩せたんじゃないのか、トゥリユー？」

立て続けに数杯のウイスキーを食道の奥へ放りこんでから、ナカースルは不審そうな視線を友人の顔の輪郭に沿って滑らせた。

「前はもつと子供っぽい顔をしていたような気がしたが……」

「前と言って……もう二年も前じゃないか」

「二年……？もう二〇歳になるのか？」

「まだ。あと一年ある」

レーフラムはワインのグラスを傾ける。友人の酒量には、とうてい太刀打ちなどできるものではないことを、彼はよく心得ている。調度、運ばれてきていたロースト・ハムの一切れを口に運び、ナカースルの“保証”がほらではなかったことを確認する。

「だろう？」

自分も皿に手をのびしながら、ナカースルは目を細めた。

「本物だぜ、本物。酵母蛋白からの合成でもなければ、植物蛋白でもない。パストラール・コーラルで放牧された肉牛の腿肉だぞうだ」

「パストラール？」

「ああ。ロースト・ビーフもあるが、こいつは酒と一緒ににはちょっとポリウムがあまりすぎる。ん？どうした？」

「……え？いや、何でもない」

コーラルから移入された最高級のコーヒーが供され、ロースト・ハムが、ロースト・ビーフがレストランのテーブルを飾る。

連邦圏最大の穀倉地帯であるコーラル恒星区に隣接するヒューロザイオンであつてみれば、高価な天然食品が比較的安価で入手できるのだろうが……

コーラル……連邦空軍が、その存在意義を最大限に証明するところ。天然食品への衰えない需要と、連邦圏の中央という絶好の

位置関係。連邦の大資本はこぞってコーラルの支配に食指を動か
し、そして最大の資本が生き残った。シュレフ・コングロマリッ
トがそれである。

シュレフの名は、レーフラムにとつて嫌悪の不協和音を伴つて
響きわたる。彼の実母であるリーザ・ローレンスの父は、連邦空
軍の実力者だった。

本人の実力もあつたのだろうが、巨大な官僚機構である連邦空
軍で若くして栄達するために、ナイザル・ネレイドは“縁故”と
いう武器を十二分に利用したようだった。そして、ローレンス大
将が亡くなつて間もなく、艦隊最高司令長官の座を確実視されて
いた連邦空軍をナイザルは退役してしまふ。彼が二人目の妻に迎
えた女性も、シュレフ・コングロマリットの幹部の妹だった。

「考え込んだな……酒は愉快に飲むものじゃないのか、トゥ
リユー。そんなだから、いくら飲んででも太れないんだ」

「……酒ばかり飲んでいても太れないと思うけど？」

「俗説さ。考えてみるよ、ウイスキー、ビール、ワイン、ジン、
エトセトラ、エトセトラ……多くが穀物をもつてその原料とする。
麦しかり、米しかり、コーンしかり、ジャガ芋しかり。穀物の変
えたる姿こそ酒であつてみれば、これを飲んで痩せるはずがない、
反論があるか、ええ？」

「反論は医者ときみの肝臓に任せるよ」

死別したわけでもないのに、レーフラムの母に関する記憶は希
薄だった。一六歳で空軍士官学校に入学してから、母星コーネッ
ト市郊外の父の邸宅には一度も戻っていないレーフラムである。
その一六歳以前の記憶を探ってみても、母に関する記憶はつす
ぼんやりしたものでしかないのだ。

「……おい、トゥリユー、聞いているのか？」

「……うん？」

「今度の艦隊出動のことさ」

ナカースルの声が自然に低くなる。すでにウイスキーのボトル
は四分の一ばかり空いているが、特に酔つた様子も見せない。

「異星人が相手だそうじゃないか」

「エイリアン？」

「そう……エイリアン。宇宙考古学者のなれの果てとして、何か
一言あつてもいいと思うがな」

「……別にエイリアンを研究するのが、宇宙考古学というわけじ
やない。それぐらいは知っていると聞いたけど、レイ」

「悪い……怒つたのか？」

「怒りはしないよ。あまり、昔のことを言わないでくれないか。
もう、諦めたんだから……」

「そうかな？」

ナカースルは新たに注いだウイスキーを口に運んだ。四年前に
連邦のジャーナリズムを騒がせた“起源論争”を、彼は不思議に
よく記憶している。シエルメス人の起源を求める論争に全く新し
い仮説を提案した一五歳の少年のことを。

「天才つてのはいるもんだな。一五歳で連邦中の注目の的だ……」

感心した二年後。ナカースルは、見覚えのある顔を士官学校の
同窓に見いだすことになる。

「君を知っているぜ、レーフラム・ネレイド。あ、俺はレイラー・
ド・ナカースル。レイと呼んでくれ……なんで、士官学校にい
るんだ？ 大学を止めちまったのか」

あの時も、レーフラムは同じ言葉を投げ返した。諦めたんだ……
と。

「……で、どうなんだ。本当にエイリアンなのか？」

「機密だ。どうして知っている、レイ？艦隊の司令部しか知らないはずだ」

「おれも一応は司令部の一員だ。下っぱだがね。この情報が先任参謀級までしか知らされていないってことも知っている。しかし、軍隊も人間の作った組織だってことさ」

「別に咎めるつもりはないよ、レイ。エイリアンかどうか、情報が少なすぎる。我々に与えられている情報がね。可能性はある。連邦圏は、銀河系宇宙の六分の一近くまで広がった。人類以外の知性と遭遇する可能性は、これまでだってあったさ」

「そう思うのか？」

「思わない、と言わせたいわけ？」

「別にそういうわけじゃない」

ナカースルは指摘する。レーフラムが二年前に発表した論文には、たとえ銀河系に二〇〇〇億の恒星があったとしても、全く同時期に、同レベルの文明が併存する可能性が一般に思われているよりも遥かに低いものであることがのべられていた。

「通して読んだわけじゃない」

「ちょっと照れたように、ナカースルは顎を撫でる。」

「……知ったかぶりだがね。少なくとも、当時の新聞や雑誌にはそう書かれてたような気がする」

「よく覚えてるね……」

レーフラムは肯定も否定もしない。昔のことに触れられるのは、余り心楽しむことではないようだ。

「さっきのエイリアン云々……だけど、レイ。これまで連邦圏は、異星人の文化と接触した記録はない。それに、過去の文明の遺産が発見されたということもない。我々は孤独なのかも知れない」

「二〇〇〇億からの星があってもか？」

それなら連邦空軍の存在意義はどうなる……ナカースルは言う。連邦空軍の首脳は、しばしば発言しているではないか。連邦圏の拡大は、悪意のある異星人類との遭遇の確率を高めつつある。連邦空軍の主戦兵力を、地上師団から宇宙艦隊に変更するべきである。事実、連邦空軍は、現在五個一万二〇〇〇隻の制式艦隊を、一挙に九個五万隻に拡張する『第一次建艦補充計画』を議会に提出している。

かぶりを振り、レーフラムは空軍の見解に異論を提示した。

「標準的なG型恒星の寿命は約一〇〇億年。エルメティア恒星系の太陽は約四〇億歳だと考えられている。ところが、人類の生い立ちについては五〇〇〇年以上前のことは何もわかっていない。シエルメス人が、定説どおりにエルメティアで発生したとしても我々の歴史は四〇億分の五〇〇〇でしかない。しかも、外宇宙に進出できるようになったのは、わずかに六〇〇年ほど前からだ。まったく同時期に、同程度の文明が接触可能な範囲に発生しているなどという偶然が都合よく起っていると思うかい？」

「……まあ、確率が低いことは認めるさ。しかし、もし本当に異星人が存在したら、どうするつもりだ？」

「どうもしない。それはそれで喜ぶべきことじゃないのかな。我々はひとりぼっちじゃなかったんだってね」

レーフラムはワイン・グラスを空けた。

「怖いのは、彼らが異星人ではない場合だよ、レイ」

「何だって？」

レーフラムは、空になったワイン・グラスを照明にかざす。澄明なガラスが、蝋燭を模した淡いオレンジ色の灯火を弾いて光の欠片をまき散らす。漆黒の瞳に飛び込んだ欠片の一片が小さな焔のように揺らめいて見えた。

連邦の原型、正確に言えば、連邦発祥の地であるメルティアの源流は植民惑星だったのではないか。

「なぜ、そう思うんだ？」

「仮説でさえなかったんだけどね……材料が足りなさすぎた。

もう一度、メルティアへ行つて、今度こそスルフエイク侯爵から建国神話の話を詳しく聞かせて貰うつもりだった」

「どうして行かなかったんだ？」

レーフラムは応えない。ウエイトレスにワイン・グラスを満たしてくれるように頼む親友に、ナカースルの視線は不思議なものを見るそれに変わる。

「痕跡あともたどれないほど遠い宇宙からやってきた植民者が連邦の原型だったとしたら……」

よほどしばらくしてから口を開いたとき、レーフラムはそれと悟られぬほどに微妙に口調を変えていた。

「植民先が連邦……メルティアだけだったとは信じられないんだ」